雲林略記

墨乃江
信元家

特別
ル3
3617
95

戸ヶ屋の神本霊松と中条八幡古
無和事中乃比農業いとなの紀家なの飛
西日住吉明神を奉祭稲作不満日
寸勝を考へ系清たるを無る
ひるの日方向の打ち千浅沢無戈
社を奉祭ふ何ものもなく白鷺一羽
飛来り根引き小松一株植えられし
植付の初日陽を受け中村稲穂
三度も折れ不満出鷺一羽飛来りて
鳴ふ知らる事なし中村あ事ふ見後ふ
よくく船を漕ぐふ小松を
育て神へ持帰り神へ植えつけ長寿鷺
又人民ちのをくふしぎの思ひ和
あるの家の家ふ神神社ひ汝
居住紀ま地まう事ひ一つの信徳を
さつく住吉の植要八千四米繁る生命ぬ

鬱々とさはく陰しめて怪々色怠るへからく
不良義の不正受流りさてまた庭へ植置く
代々ゑおなく青鳥々怪偏いふし以て枝葉不白く
繁茂し今文政の頃迄も四ヶ有余年の
星霜を経る事たとへんかたなき現前の人々後
明和九の頃種たかき紀や一類とある小松一株
生し是文化の寛永と思ひ育て不
今年のおもしく一本に雲松とおなしく是文政

こ頃追々四五十業乃星霜を送り深きか小
枝繁茂して妙彩是金箔君明神の御寶瑞
現然たり磯打波の路又いはき松と緑々たる
と信ひて深秘屋と唱へ以来文芸蒼松盛
まするゆへ神木有増しく由来をまづ記す

于時文政二
卯年再板

奉願覺書

小菊村

栗原民造